

集団「状況」における攻撃的行為と愛他的行為

——学級集団構造分析の一視角——

竹 川 郁 雄

1. はじめに

対面的相互作用の場において、儀礼的行為や戦略的行為がどのような意味を持ち、どのような枠組みのもとで演じられるか、E. ゴッフマンは多くの有益な指摘を行ってきたが、そこでは「社会的場面」で既成のものとなった準則や規範が前提となっていた。しかし、学齢期の児童や生徒の集団の場合、彼らは発達過程の段階途上にあり、自律的な道徳的規範を内面化しておらず、それぞれの場にあった配慮ある役割取得がなされていないため、その場で時々刻々と形成される規範や集合状態に依拠して、集団内での対面的相互作用が、手探り的に営まれることとなる。一定の集団において成員間で既存の枠組みそのものが成立しておらず、集団内規範が未定着な状態（E. ゴッフマンが「散漫な社会的場面」と呼ぶ状態）における対面的相互作用については、これまで十分な検討がなされてこなかった⁽¹⁾。

本稿では、規範が未定着な状態から出発する集団において、個人の自己呈示としての行為が、対面的相互作用の集積として、集団「状況」を形成する際に、情緒的側面が集団全体に重要な機能を果たし、各成員にも重要な意味を持つことを、攻撃的行為と愛他的行為をとりあげて示したいと思う。

日常生活において、攻撃的行為の典型例は「いじめ」行為、愛他的行為の典型例は「思いやり」行為ということになる。 「いじめ」は1985年頃より問題となり、種々の調査が実施され多くの解釈が試みられてきた。しかし、「いじめ」を傍的に眺めあるいは唆す集団のあること⁽²⁾、あるいはその場の雰囲気「いじめ」の発生や攻撃対

大阪市立大学大学院

集団「状況」における攻撃的行為と愛他的行為

象が依存していることなどについて⁽³⁾、十分な説明はなされていないのが現状である。

以下、これらの問題点を射程に入れつつ、攻撃的行為と愛他的行為に関する表出過程の枠組みを設定し、次に行為の主体となる側と受容する側との二者の牽引関係に注目し考察を進める。さらに、新しく編成されたばかりで、成員間で相互に規範形成を行っていく集団「状況」の変遷について論及を進める。次いで、教室内で発生する「いじめ」行為と「思いやり」行為について、若干の理論的説明を加えたいと思う。

2. 攻撃的行為と愛他的行為、及び攻撃・愛他誘発性

最初に攻撃的行為が表出される過程について枠組み設定を行う。攻撃的行為とは、他の生命体に対して精神的であれ肉体的であれ、何らかの危害を加えようとする行為である。攻撃的行為の発生論について、その学説には種々あるが、単一の攻撃理論ではすべての現象を説明できないのが現状である⁽⁴⁾。つまり個人の内面に攻撃的エネルギーが鼓吹され動機づけられる要因は、幼少時の心傷経験から前日の心理的葛藤状態まで種々の発生過程が存在し、多くの場合それらが複合している。また、他者への攻撃動機となる力動要因が形成されたとしても、それがすべて攻撃的行為としてただちに表出されるわけではなく、他の行為に転化されたり、内に持続されて後に噴出されたり、逆に対象への苦痛に対する同一化を行ったりというように⁽⁵⁾、行為生成過程が非常に複雑であることも大きな要因である。

さらに、ある個人が攻撃的行為をとるかどうかどうかという決定は、個人を取り巻く集団「状況」、つまり集団成員の対面的相互作用によるこれまでの過去の集合的状态の集積と密接に結びついている。とすれば、それが現実表出される際の集団「状況」を分析枠組みの中に導入することが必要である。このように考えると、①(客観的な)原因形成の複合性、②行為生成過程の複雑さと蓋然性、③行為表出の「状況」依存性という点で、B. ヒンデスの指摘するように⁽⁶⁾、「能力—結果」(capacity—outcome)思考を脱することが必要である。

次に愛他的行為とは、自発的にはじめられ外部からの報償を当てにすることなく、相対的ないしは社会的弱者の困難な状態を助けるために実行される行為であり、その行為の特徴として自発性と打算的でないことがあげられる⁽⁷⁾。その発現メカニズムは攻撃的行為と同様の過程で進行するとみなせる。ただ愛他的行為の方が、受容する側の感情的満足の有無がその行為の適否を左右するという意味で、行為を受容する側の状態に依存する面が強く、社会的環境やその時の集団「状況」を厳格に看取する必要性が強い。

両者の違いは存在するが、D.クレプスとD.ミラーも指摘しているように⁽⁸⁾、同じコンテキストで対比的に考察することにより両者の同質面に注目しつつ、差異性を明らかにすることが可能となる。そこで、ここでの分析視角を行為の発現する集団「状況」を組み込んで、次のような2段階に分けて整理する。

資源形成段階 攻撃的行為と愛他的行為（以下攻撃的・愛他的行為と略）は表出される以前に、何らかの形で資源が蓄積される。その際、攻撃的・愛他的行為の資源が形成される要因は、第1に個人がどのような階級的位置や国家的統制の中にあるかというマクロ環境としての「体制要因」、第2に身近な外的環境を包含している「社会的環境要因」、第3に遺伝など生物的要素や過去における心傷経験からの性格変容などを含む「性格要因」がある⁽⁹⁾。これらの要因が組みあわさって、攻撃的・愛他的行為の力動因と行為射程からなる資源を個人の内面に生成し、事後の行為分析の際の発生原因を構成する。その時、攻撃的・愛他的行為の資源の発生方向を決める行為射程は、ある時期に行為が表出される際の個人の主観的動機の枠組みとなり、手段の選択と対象の特定化にかかわり、次の集団「状況」段階で具体的な形式をとって現れることとなる。

集団「状況」段階 攻撃的・愛他的行為が実際に発生する際の集団「状況」であり、それはある範囲をもった空間、行為主体及び対象となる者、当事者以外の集団成員、及び集団内で形成される雰囲気（情緒的ネットワーク）と規範によって構成される。

ある時点で行為主体の内面に攻撃的・愛他的資源が形成され、それによってある範

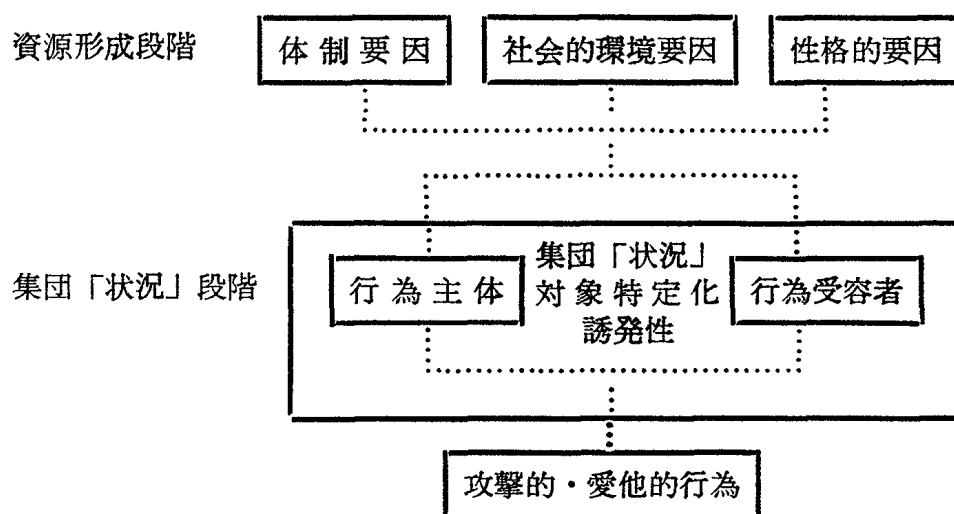


図1 攻撃的・愛他的行為の発現モデル

集団「状況」における攻撃的行為と愛他的行為

囲内の行為射程を持ち、今にも攻撃的・愛他的行為として発動しようとしている。そして集団「状況」内で、一定の空間を視覚的に確認し、成員内の情緒的ネットワークを主観的に解釈し、そこから集団「状況」を定義づけする。さらに攻撃的行為の対象となる者が特定化され、具体的に攻撃手段を決め、それを阻止しようとする集団規範からの抑止作用が働かなければ、攻撃的・愛他的行為が遂行される。以上の要因を組み込んでモデル化すると図1のようになる。

ところで、攻撃的行為と愛他的行為の発現過程においては、常に対象となる相手が存在し、行為主体側と行為受容側からなる対面的な二者の牽引関係が問題となる。攻撃的行為や愛他的行為を引き起こす誘発性（以下攻撃・愛他誘発性と略）は、一見何もしないということから行為に対する説明枠組みの中に導入されないことが多い。しかし、情緒的ネットワークの張りめぐらされた集団「状況」においては、対面的相互作用の重要な要素として考慮に入れるべきであろう。

攻撃・愛他誘発性には、周囲の他者と比較して容易に傷つきやすい「脆弱性」と、他者の関心を過度に喚起したり印象形成を促して、対象の特定化を引き起こす「挑発性」の二側面が考えられる⁽¹⁰⁾。ゴッフマンが指摘しているように⁽¹¹⁾、挑発性を帯びることを本人が意識しているがゆえに過度に防衛的で萎縮した反応をしてしまい、ごく普通の社会的相互交渉に齟齬をきたし、自ら脆弱性をつくり出してしまう場合があり、逆に、弱くて傷つきやすいがゆえに、同情の対象としてであれ嘲笑の対象としてであれ、周囲の者の関心をまねきやすく、挑発性を持つというように脆弱性が挑発性を生み出す場合があり、両特性は密接に関連している。

脆弱性の主要な原因は、たとえば学習成績が低いことや不潔な服装をしているなど、他者よりも相対的に弱い部分があるために生ずる。しかし、どのような人間にも何らかの形で弱点は存在する。それが常に攻撃的行為や愛他的行為の対象とならないのは、その人間の弱味が問題となるコンテクストがその時の集団「状況」の中に込められているからであり、従ってその時の場としての集団「状況」に左右されて、弱味が顕在化するかどうか決められることになる。何が相対的弱点となるかは、その場の優勢な価値基準に照らして総合的に判断される。不潔な服装であっても、工事現場や調理場のような所では脆弱性として問題視されることが少なく、逆に女子学生のサークルや儀礼的な服装を要求されるフォーマルな集まりでは、集団「状況」内規範の中心的な価値内容となってわずかな不潔感でも脆弱性となる。

挑発性についての性質は、对人的魅力と同様の性質を持ち、特定の状況のもとにJ. ボードリヤールの言うように「意味を欠いた言語表現と同じように魅惑するもの」で

あり⁽¹²⁾、「反応しないわけにはいかない対象」となる。それは、何らかの形で差異性が強調されてできたものであるが、常時挑発性となるわけではなく、集団「状況」内の情緒的ネットワークと関連しつつ発生する。そこで次に集団が新しく編成された後、集団「状況」がどのように変化していくかについて考察する。

3. 集団「状況」の安定化過程

入学時に編成された学級集団においては、背後のより大きな集団の枠組みとしてある、集団「状況」のごく一部の要素だけが当初から成員間で共有されているだけで、他の要素は成員たちがそこでの集団「状況」に、協働して定義を与えていくこととなる⁽¹³⁾。

その際、集団「状況」そのものがこれまでの自己の経験から類型化することができない時、そこでの集団「状況」は行為者にとって非常に重要な投企の場となり、これまで地平の領域に属していた集団「状況」への適応がテーマ化されることとなる。その時成員は集団「状況」内にどのように存在しているのか、さらには集団「状況」にふさわしくふるまっているかどうか、すなわち「状況にふさわしくふるまっていると、周りの人に見えるようにふるまっているか」どうか⁽¹⁴⁾、という多かれ少なかれ他の人々のまなざしを考慮する行動が、大きな関心事となる。そうした視覚的な面を含めて相互に了解できる対面的相互作用の漸次的な深まりによって、成員間で共有された状況の定義づけが行われるようになる。

しかしその場合でも、私的な状況の定義づけは多く発生する。状況の定義づけは、意思を行動に移す際に準備として必要なものであるが⁽¹⁵⁾、通常の場合反省過程の後、既成の社会的定義が適用されるか、新たに私的な定義が作られる。「個人はしかるべき制度的パターンによって定義される社会的役割や役割期待という客観的な意味(…)に対して、その役割にかかわる集団「状況」を主観的な仕方で定義する」こととなり⁽¹⁶⁾、役割が未分化な集団内では、各成員はそれぞれの個人誌から集積された知識をもとに独自に私的な定義づけがなされる。その定義内容は成員間で異なるため、時に事実認知レベルでの対立が生じたり、対人評価の面で不和が生じたりする。

しかし時間の経過とともに、私的な状況の定義づけは成員間の全面的な対面的相互作用がなされるにつれて、多くの成員の間で共有された定義づけに変更されていく。集団形成時には、成員間で共有された状況の定義づけが少ない匿名的な集団であったのが、対面的相互作用の深化によって、次第に役割あるいはそれに近い相補的行為の期待がそれぞれ分化し、情緒的一体感が発生して、より組織化された集団へと発展し

集団「状況」における攻撃的行為と愛他的行為

ていく。

ところで集団「状況」は、その時々客観的に存在し、常に変化している。空間配置や人物構成などに大きな変化がない限り、集団「状況」は個々の成員によって一定の範囲を持って保持されていく。そのため成員には一定の具体的な視覚的イメージを持ち、情緒的印象を伴った生活空間として定義づけされる。状況の定義づけによって内面化された視覚的イメージは、多くの成員によって共有されることによって、その集団「状況」固有の視覚的イメージとして安定化していく。集団全体からみれば、成員によって共有される状況の定義づけの総和が、その集団「状況」の安定度を示しているといえる。

集団「状況」の安定化は、これまで無秩序にふるまっていた成員の行為様式を細部にわたって規定する圧力を発生させる。すなわち、集団規範としての「状況適合性ルール」(situational proprieties)が生じる⁽¹⁷⁾。このルールは、集団に対してフォーマルに規定されたルールを前提とするが、成員間で共有された「状況の定義づけ」をもとに集合的に形成されるために、そのルールに反発する意識のもとに状況が定義づけされフォーマルなルールを無効にする形で内容規定されることもある。集団「状況」にふさわしくふるまうように仕向ける状況適合性ルールは、前述の私的な「状況の定義づけ」とかかわって、各成員の集団「状況」における行為の適合度を規定し、そこから成員間で集団「状況」を察知する能力や集団「状況」に適合する能力の差を発生させる。こうしたルールは集団内で直接的個別的に形成されるだけに、ルールへの違反行為は成員間で敏感に看取され、なんらかの形で制裁的意図を持つサンクション行為がその他の成員によって実行されることとなる。そして状況適合性ルールが成員により過度に意識されると、自己呈示は他人のまなざしを気にした演技的主体性中心の行為となって、対面的相互作用は多分に「印象操作」的なものとなる⁽¹⁸⁾。

こうして、一定の間持続する空間配置が基礎となって、そこにそれぞれの個人誌を持った成員が対面的交渉を繰り返し、その結果重要な集団「状況」としてテーマ化され、各成員の中に一定の具体的な視覚的イメージを持って認識されることとなる。新学期の教室における集団状況は、成員にとって最も重要なレリバンス対象となり、対面的相互作用過程は個人の発達過程における社会化の側面のみならず、個人の生活世界における重要な意味付与過程として機能し、情緒的安定のより所となる。そして、それがある程度恒常化し、各成員に内面化されるに至ると、そうした集団「状況」への同一性感覚が生じ、状況適合的指向が感覚的身体的に保持されるようになる。こうなると、自己の外観、たとえば服装、化粧、髪型、身のまわりにつける装飾物など、

その場にふさわしく整えようとする意識が働いていく⁽¹⁹⁾。成員によるこの状況適合的指向の内面状態は、重要な集団「状況」に対する「同一性」として保持されるに至る。

R. D. レインは、同一性形成にはすべて他者が必要であると考え、他者との関係において自己が実現化される「補完的同一性」を主張する⁽²⁰⁾。彼によると、「補完性」とは他者が自己を充足させたり完成させたりする人間関係の機能のことであり、自己の同一性は他者の再定義によって自己定義され、そのことにより自分が同一人物だと感じることができる。つまり他者との相補的關係の中で一貫した自己を安定的に感じることができるかどうか、同一性形成の重要な契機となる。アレグザンダー・ジュニアとJ. ラッドは⁽²¹⁾、「状況化同一性」(situated identity) が人々の間で形成されることを主張し、実験レベルで検証しようとしている。彼らによれば、「状況化同一性」は社会現象の理解と位置づけにかかわる過程において形成され、ある集団「状況」を一般化し単純化して記憶することにより、他者が行う多様な行動の選択に関しての予測を可能にする。また、T. シェフは、役割と区別され相互作用において成員間で投企される行為が言語上で相互に承認された「状況的同一性」(situational identity) を設定している⁽²²⁾。

彼らの説を参考にしながら前述した考察を含めて仮説設定を行うと、「状況的同一性」とは、「ある一定の空間において、自己が自己の認知する集団「状況」内の一構成員であるという感覚であり、他者によっても一構成員として認められていると感じることができる、一貫した自分らしさの状態をその集団「状況」内で保持できる感覚」である。E. エリクソンが主張した自我同一性や集団同一性がより通時的な一貫性を持っているとすれば⁽²³⁾、「状況的同一性」はそれらの同一性と共有する面を持ちつつ、空間配置や視覚的イメージとつながったより共時的な安定性に関わるものだと言える。

さて、個人の内面に集団「状況」への同一化が生じると、集団へのコミットメントも変化が生じる。T. パーソンズは、学級集団の中で一人の子供は学習している主題そのものに興味を持ち、もう一人の子供は教師の好ましい態度にいっそう関心を示すなど、多くの動機づけが存在するが、それらはよい成績の達成という「状況的に一般化された目標」に収斂すると言う⁽²⁴⁾。しかしながら、彼も限定しているように、学校体系の役割期待を成員一人ひとりが受け入れる場合に限って、よい成績の達成が「状況的に一般化された目標」となり得るのであって、その時形成される目標内容はそこでの集団「状況」に依存しており、常に学校体系の業績性指向のもとに整序されるわけではない。むしろ対面的相互作用の現場としての集団「状況」を念頭に置くならば、集団内で形成される目標は、フォーマルに規定された目標と対峙しつつ集合的に内容

集団「状況」における攻撃的行為と愛他的行為

規定される。たとえば学級集団内において、教科学習の修得よりも娯楽的な感情表出行為が多く発生し、インフォーマルな情緒的一体感の共有という自己完結的目標が、「集団状況内で共有化された目標」となることもある。集団設定時に一律的に形式的に設定された集団目標が、時間の経過によって、変形されたり付加的な意味を加えられて内容変更され、さらに目標への達成手段がそれぞれの集団「状況」に応じて具体的な形式を与えられ、集団としての個性を持つこととなる。

こうして、集団成員の側からは、共有化された状況の定義づけが進み、「状況的同一性」と感情操作により、集団「状況」へ適合させる指向性が働く。一方集団「状況」全体の側からは、状況適合性ルールとそのサンクションが整備され、「集団状況内で共有化された目標」が集合的に形成され、集団「状況」が安定化する。しかし、その安定化する状態は、一律的なものではなく、あくまで集団「状況」に依存し多種多様であり得る。

4. 教室内の「いじめ」行為と「思いやり」行為について

「いじめ」行為とは、ある集団内の相互作用過程において、腕力や資源動員能力の点でその時の集団「状況」の中で相対的に優位に立つ一方が、劣位の者に対して通常目的と手段の間に正当的根拠がないかあっても過度に及ぶ手段によって、精神的ないしは身体的苦痛を与える攻撃的行為である⁽²⁵⁾。

それに対し「思いやり」行為とは、相手への配慮意識の強く働いた行為であり、1. 状況の定義づけが共有化されて、相手の欲求や状態について認識し、2. 状況適合性ルールに順応していると感じ、3. 対象者に行為が必要であるとみなして行為を構想し、4. それが状況への同一化を促し、他者に承認されるであろうという予測し、5. 時宜を得た適切な手段が採用される行為である。

さらに周囲の者を自発的に愛他的行為へと導く友好的挑発性力動因とでも言うべきものが発生し、それが自然表出する形で「思いやり」行為が現出するのだと考えられる。

		挑発性への反発	挑発性への同一化	「いじめ」行為と「思いやり」行為の分岐について、集団「状況」の状態に応じて決められる攻撃・愛他誘発性の二側面である、挑発性と脆弱性によって分類してみると、図2のようになる。
脆弱性	なし	他者の反発による孤立	魅力を帯びて人気者となる	
	あり	排除的「いじめ」行為を受ける	同情から「思いやり」行為を受ける	

図2 挑発性を有する者への反応の4分類

これはその時の集団「状況」の中心的な他者評価基準に照らして、挑発性が発生する者について、横軸に状況の同一化を促す挑発性と、状況の同一化を阻害する挑発性を、縦軸に脆弱性の有無をとったものである。たとえば学習成績や運動神経のよいことが挑発性を有する場合、集団「状況」の流動的に変化する情緒的ネットワークにおいて、それが友好的に受け入れられるならば成員の集団「状況」への同一化による安定化を促し、挑発性を有する者に脆弱性がない時、人気者として評価され、あれば周囲の者に脆弱の性質に対して同情心を抱かせて「思いやり」行為を促す。しかし、挑発している性質に反発を招いて拒否的となっているならば、脆弱性がない時、嫌われて孤立化し、あれば排除的な「いじめ」行為を受けることとなる。挑発性が行動面に関わるものならば、状況適合性ルールや集団「状況」内で共有化された目標との適否によって、集合的に評価されることとなる。

5. 結びにかえて

以上、集団規範が未定着な集団において攻撃的行為と愛他的行為がどのようなメカニズムで発現するかを、当事者間の牽引関係と、集団「状況」の安定化過程を中心に考察し、教室内の集団における「いじめ」行為と「思いやり」行為の説明に適用を試みた。特に、攻撃・愛他誘発性の二側面としての挑発性と脆弱性は、個々独自に形成され変化していく集団「状況」と結びついて内容規定されるため、集団内でしか見えない微細な差異性が攻撃的行為や愛他的行為の対象となり、一見非常識な行動が出現したりする。社会問題として話題にされた「いじめ」問題の特徴も、集団「状況」内の状況適合性ルールに対する違反へのサンクションとして集合的に攻撃したり、ちょっとした異質性がある成員が集団「状況」に同一化して安定感を得ようとするのを妨げるために、集合的な排除行動となっているのだと考えられる。

本稿では、集団「状況」の安定化過程についてのみ考察を進めてきたが、集団「状況」の変容や解体についても同様の考察が可能である。ここで問題にしてきた集団「状況」中心的なアプローチでさらに考察を進めるならば、既成の状況適合性ルールの無効化と改変、それによる各成員の内面における集団規範の組み替えと⁽²⁶⁾、同一性形成のあり方が問題となろう。

<注>

- (1) Erving Goffman, *Behavior in Public Places*, Free Press, 1963, pp. 18-19, 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』誠信書房,

集団「状況」における攻撃的行為と愛他的行為

- 1980, 21頁。
- (2) 東京都教育委員会『児童・生徒の問題行動の防止と健全育成の徹底について（通知）』別添『指導のための資料』, 昭和60年5月31日。
 - (3) 麦島文夫・清永賢二・高橋良彰「いじめに関わる非行の実体調査研究」『科学警察研究所報告—防犯少年編』26巻2号, 昭和60年12月。
 - (4) 一般的には, 次の5説, 1. 本能説, 2. 精神分析学, 3. 性格心理学, 4. 欲求不満—攻撃仮説, 5. 社会的学習理論が有力である。間庭充幸『犯罪の社会学—戦後犯罪史』世界思想社, 1982, 8-29頁。福島章『現代人の攻撃性』太陽出版, 1974, 194-269頁。攻撃的行為についての個々の学説検討は本稿の目的でないので, ここでは言及しない。
 - (5) Anthony Storr, *Human Aggression* Penguin Press, 1968, pp. 93-99.
 - (6) Barry Hindess, "Power, Interests and the Outcomes of Structures", *Sociology*, 1982, 12-4, pp. 498-511. B. ヒンデスは権力論の論者に対して批判し, 闘争の場 (arena) が必要であると説いているが, 本稿においては集団内「状況」で生かされている。
 - (7) 中村陽吉「援助行動とは」, 中村陽吉・高木修共編著『「他者を助ける行動」の心理学』光生館, 1987, 2-4頁。
 - (8) Dennis L. Krebs and Dale T. Miller, "Altruism and Aggression" in Cardner Lindzey and Elliot Aronson eds. *The Handbook of Social Psychology*, 3rd. edition, vol. 2, 1985, pp. 1-71.
 - (9) 間庭充幸, 前掲書, 33-35頁。
 - (10) 法務省法務総合研究所『犯罪白書』昭和91年版, 290-351頁。ここでは, 犯罪者が被害者を選定した理由として, 1. 魅力, 2. 誘発, 3. 助長, 4. 弱さ, 5. 無難, 6. 機会を挙げている。1. 2. 3. は挑発性に, 4. 5. は脆弱性に, 6. は集団「状況」に含めることができよう。
 - (11) Erving Goffman, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc., 1963, pp. 16-18, 石黒毅訳『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房, 1984, 33-36頁。
 - (12) Jean Baudrillard, *De La Séduction*, Galilée, 1979, 宇波彰訳『誘惑の戦略』法政大学出版局, 1985, 108頁。
 - (13) Alfred Schutz, *On Phenomenology And Social Relations*, University Chicago Press, 1970, 森川眞規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊国屋書店, 1980, 51頁。
 - (14) 平川茂「外見の社会学 —E. ゴッフマンの「状況的アプローチ」をめぐって」『ソシオロジ』社会学研究会, 28-2, 1983, 6-7頁。
 - (15) W.I. Thomas and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*

- Dover, 1958, 桜井厚訳『生活史の社会学—ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房, 1983, 63頁。
- (16) Alfred Schutz, 前掲書, 邦訳 42-43頁。
 - (17) Erving Goffman, *op. cit.* p. 24, 邦訳 27頁。
 - (18) 桐田克利「社会的相互作用における状況の定義」『ソシオロジ』社会学研究会, 31-1, 1986, 5頁。
 - (19) Erving Goffman, *op. cit.* p. 25, 邦訳 28頁。
 - (20) R.D. Laing, *Self and Others* Tavistock Publications, 1969, 志貴春彦・笠原嘉訳『自己と他者』みすず書房, 1975, 92-115頁。
 - (21) Norman Alexander Jr. and Joel Rudd, "Situating Identities and Response Variables" in James T. Tedeschi, ed., *Impression Management Theory and Social Psychological Research*, Academic Press, 1981, pp. 83-103.
 - (22) Thomas J. Scheff, "On the Concepts of Identity and Social Relationship" in Tamotsu Shibutani, ed., *Human Nature and Collective Behavior*, Prentice Hall, 1970, pp. 193-207.
 - (23) Erik H. Erikson, *Identity and The Life Cycle*, International Universities Press, 1959, 小此木啓吾訳編『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』誠信書房, 1973, 5-14頁。
 - (24) Talcott Parsons, *The Social System*, The Free Press, 1951, pp. 239-243, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店, 1974, 240-243頁。
 - (25) 竹川郁雄「学級集団内「いじめ」の集団論的考察」『ソシオロジ』社会学研究会, 31-33, 1987, 107-109頁。
 - (26) 森田洋司「学級集団における「いじめ」の構造」『ジュリスト』No. 836, 有斐閣, 1985, 35頁。